

伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育む英語科の授業 ー得られた情報や伝えたい内容を整理し、表現することを通してー

I 主題設定の理由

グローバル化が進み、国内外で英語でコミュニケーションを必要とする機会が多くなった。伝えたい内容について、即興で伝え合い、意見や感想を述べたり、質疑応答したりする力が今まで以上に求められている。しかし、これまでの英語教育の課題として、ペアやグループでの活動、ディベートにおいて自分の意見や感想を伝えることや、質問を適切に返すことが不十分であることが挙げられている。それらの活動の中で、話しながら話の流れを考えたり、聞きながら相手の話を予想して答えの準備をしたりするなどのコミュニケーションが必要である。

2021年度に完全実施される学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、生涯にわたり、自ら課題を見つけて解決する力の育成が求められている。また、目標についてはCEFR^{註1)}が言語を用いる行為をreception（受信）、interaction（やり取り）、production（発信）に分けているのにならって、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」に加えて「話すこと」を〔やり取り〕と〔発表〕に分けて5つの領域が設定された。〔やり取り〕が設定されたことは、準備に時間をかけることなく、伝え合うという双方向のコミュニケーションを図る資質・能力の育成が重視されていると言える。さらに、目標と内容において、「思考力・判断力・表現力等」に関する記載がなされ、今後は、コミュニケーションに関わる思考力等を高めていく必要がある。

これからの中学校の英語教育では、将来の予測が難しい時代を子供たちが生き抜くために、これらの力を身に付けさせる具体的な言語活動を設定して授業改善を行い、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが必要であると言える。

前研究シリーズでは、「気付きを促し、コミュニケーション能力を育む英語科の授業ー批判的思考を用いるための構成要素に着目してー」という研究主題を設定し、研究に取り組んだ。コミュニケーション能力を育む手立ての一つとして、批判的思考を用いる場面を設定し、相手に伝わりやすくするために、内容について思考させることで、気付きを促し、子供たちは気付いたことを基に自分の原稿や発話にいかすことができた。これらの取組は、子供たちのコミュニケーション能力を育むことに有効であった。

しかし、自分が伝えたい内容を考える過程で課題が残った。自分が伝えたい内容を考える際に、伝えたい内容を広げるための情報が十分ではなく、僅かしか伝えたい内容を考え出すことができずに、英語でうまく伝えることができない子供が見られた。また、そのような際に、自分では気付かなかった他の情報の存在に気付かせて、その情報を整理させることが必要であった。

そこで、英語科においては、研究主題を「伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育む英語科の授業ー得られた情報や伝えたい内容を整理し、表現することを通してー」と設定し、研究に取り組むこととした。

Ⅱ 研究の概要

1 英語科で目指す子供像

本校英語科では、目指す子供像を以下のように設定し、研究に取り組むこととした。

得られた情報や伝えたい内容を整理して、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供

「得られた情報や伝えたい内容を整理」するとは、情報や内容の多様な選択肢を考え、それらを選択したり抽出したりすることである。また、情報や内容を統合することもある。そして、即興でコミュニケーションをするに当たって、どのような順序で伝えればいいのかや、どのような表現を用いれば相手に効果的に伝わるのかといった談話構成について考えることも含まれる。

2 育みたい資質・能力

私たちは、英語科で目指す子供像に近づけるために、次の能力を育みたいと考えている。

正しい文法や発音で表現する能力（文法能力）
伝わりやすい談話や文章を構成する能力（談話能力）

正しい文法や発音を用いることができなければ、伝えたい内容を正しく相手に伝えることはできない。また、伝え方の順序や表現をどうするかを考えることで、相手に効果的に伝わる。相手に伝わりやすくするために内容について思考を働かせることは、コミュニケーションを図る資質・能力を育むために必要であると考え。なぜなら、子供たちは相手に伝わりやすくするために内容についていくつも考え、その中から自分の伝えたい内容を選択したり抽出したりするからである。

なお、コミュニケーションを図るための基礎となるアイコンタクトや声量などの社会言語能力、及びコミュニケーションストラテジーを使用する方略能力を育むことも重要であるが、検証の対象とはしない。

3 資質・能力を育むための手立て

近年の英語教育界で注目を集めている思考力を育む教育法にCLIL^{註2)}がある。CLILとは、言語教育と教科の内容とを統合した形で行う教育方法の総称である。教科内容を題材にしてさまざまな言語活動と指導を行い、外国語の5領域を向上させていくことを目指している。また、CLILの基本原理とされる「4つのC^{註3)}」がある。これら4つのCの要素をすべて考慮しながら、言語を習得させる機会を提供する。さらに、学習する際には、できるだけ私たちが現実に目にするオーセンティックな題材を活用することで学習への動機づけを高めることができる。また、文字だけではなく、音声、数字、図、絵、写真や映像といった情報を活用することも奨励している。そうすることで、和泉伸一(2016)は、「理解や暗記に頼るだけの学習ではなく、応用、分析、評価、創造といったさまざまなレベルの思考力を刺激する」ことができると述べている。この理論を参考にして、学習する場面において、適する題材でコミュニケーション活動を必要に応じて取り組ませていく。また、コミュニケーションを図る資質・能力を育むために、情報や内容について思考を働かせる場面を設定する。

(1) 拡散的思考と収束的思考を働かせる場面の設定

単元全体を通して、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育てるために、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定する。拡散的思考を働かせる場面として、単元のはじめに、Speaking Checker（以下SC）（後述3(4)参照）を用いて、本単元の場面設定（課題）を提示し、学習の見通しをもたせる。そして、与えられたトピックや場面において、相手に伝わりやすくするために、得られた情報や内容について考え、グループや学級で確認させる。その際に、得られた情報や伝えたい内容のよさを確認する活動を設定する。やり取りの活動の後や、原稿や自分の考えをまとめたものの作成及び修正をしていく際に、なぜそのように発話したかや、原稿や自分の考えを修正した理由を記述させる（「拡散的思考のモニタリング」）。収束的思考を働かせる場面としては、やり取りの発表や原稿を作成して様々なAdvanced Activityを行ったりライティング活動として自分の考えをまとめたりさせる。Advanced Activityの前にそれまで学んだことをAdvanced Activityにどのようにいかすかを考えさせる活動を行う（「収束的思考のモニタリング」）。その過程で、深い理解を伴った知識の習得のために、メタ認知を促進させることが重要である。また、活動の最後に、この活動を通してできるようになったこと、今後の活動にいかしていけることを記述させる（「リフレクション・モニタリング」）。このようにメタ認知を促進させることで、文法能力や談話能力を、深い理解を伴った知識として習得することができると思う。

(2) 単元の基本的な学習の流れと教師の指導

単元の基本的な学習の流れとして、Training Section（以下TS）、Advanced Section（以下AS）、Reflecting Section（以下RS）の三つの場を設定する。各Sectionにおける活動は次のとおりである。この三つの場の中に拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定する。

○三つの場の流れ



Training Section (TS)

- ・教科書を活用し、コミュニケーションの基礎・基本を身に付けるためのトレーニングに取り組ませる。なお、トレーニングでの活動は以下のとおりである。
 - ① Warm-up活動
 - ② 新出文法事項や新出語句の学習
 - ③ 教科書本文の内容把握
 - ④ 教科書本文の音読練習
 - ⑤ 新出文法事項を用いさせるコミュニケーション活動
- ・学習の見通しをもたせるためにSCで場面設定（課題）を提示する。
- ・既習事項の復習や、Interview, Speechなどのコミュニケーション活動に取り組ませる。
- ・「Advanced Section」で活用できるような表現の練習や準備に取り組ませる。

Advanced Section (AS)

- ・コミュニケーションを図る資質・能力を育てるために、Skit, Role Playing, Show and Tell, Speech, Presentation, Drama, Debate, やり取りの発表など、内容の伝達を重視した様々なタイプのAdvanced Activityを設定し取り組ませる。
- ・それまで学んだことをAdvanced Activityにどのようにいかすかを考えさせる活動を行う（「収束的思考のモニタリング」）。
- ・やり取りの発表や原稿作成をして、様々なAdvanced Activityを行ったり、ライティング活動

として自分の考えをまとめたりさせる（収束的思考）。（RS後の2度目のAS）

Reflecting Section (RS)

- ・与えられたトピックや場面において、相手に伝わりやすくするために、内容を整理する活動を通して情報や内容について考え、グループや学級で確認させる（拡散的思考）。（1度目のRS）
- ・やり取りの活動の後や発表原稿の作成及び修正をしていく際に、なぜそのように発話したかや原稿や自分の考えを修正した理由を記述させる（「拡散的思考のモニタリング」）。（1度目のRS）
- ・Advanced Activityのモデルを視聴し、相手に伝わりやすくするにはどうしたらよいかを考えさせる。
- ・Advanced Activityのモデルの伝わりやすさが、どのような表現や表現の仕方によるものなのかを学級全体で確認させる。
- ・前単元の評価と現単元の評価を比較させることで、コミュニケーションを図る資質・能力の高まりを実感させる。
- ・CAN-DOリストを使用し、英語を用いて何ができるようになったのか振り返らせたり、次の学習到達目標は何であるのかを見通させたりする。また、SCを用いて次の学習の目標を設定させる（「リフレクション・モニタリング」）。（2度目のRS）

(3) 学習を見通し、振り返るCAN-DOリスト【資料1】

本研究では、英語を用いて何ができるようになるかという観点から学習を見通し、振り返るためにCAN-DOリストを使用する。このCAN-DOリストは、5領域「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の学習到達目標を示したものである。各学年を前半と後半に分けた6段階と3年生後半の達成目標の先を見通すことができるように発展的な1段階を取り入れた7段階で構成する。CAN-DOリストは子供と教員が学習到達目標を共通理解するために年度初めに提示する。また、単元の始め及び単元終了時にCAN-DOリストを確認させ、子供たちに現在の学習達成状況を振り返らせたり、次の目標を確認させたりする。このCAN-DOリストを基に5領域の到達目標を達成させることが、コミュニケーションを図る資質・能力の向上につながると思う。

(4) CAN-DOリストと単元の学習を関連付けるSpeaking Checker【資料2】

単元の学習の見通しをもたせたり、CAN-DOリストの各段階と単元にどのような関わりがあるのかを子供たちに知らせたりするためにSCを作成する。SCには、単元の学習到達目標とCAN-DOリストとの関わりや、単元のAdvanced Activityに取り組む際の場面設定と気を付けさせたいことを明示する。そして、活動の際に、その活動を行うにあたって工夫したことと、教師が示すモデルを理解し、今後にいかにせそうなことを記入させる。

4 資質・能力が育まれたかの評価について

育みたい資質や能力が子供たちにどの程度身に付いたかを評価することで、手立ての有効性を検証する。そのために、ループリックを基に、文法能力および談話能力が育まれたかをやり取りや発表から見取る。また、発話内容や原稿を基に全体傾向を示す抽出生徒を設定し、抽出生徒にどのような変容があるかを見取る。

5 研究の経緯

本研究1年次では、理論の構築と目指す子供像を達成するために、育みたい資質・能力を育むための4つの手立てを用いることが、得られた情報や伝える内容を整理して、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育むことに有効であるかを検証することをねらいとした。そして、

英語を用いて何ができるようになるかという観点から学習を見通し、振り返るためにCAN-DOリストやSCを使用し、4つの手立ての中に、創造的思考力を育むための構成要素である、拡散的思考と収束的思考を英語科の授業に位置づけることを模索した。具体的な位置づけとして、学習の流れの中の1度目のRSに拡散的思考、ASに収束的思考を働かせる場面を授業の中に設定し、その後2度目のASにやり取りの発表を行った。

RSの中に、複数回やり取りを行う場面を設定し、やり取りをする際にどのような内容をどのような表現で伝えるかを子供たちに考えさせた(拡散的思考)。そして、ASとして再びやり取りをする際に、子供が考えた伝えたい内容や表現の中から、最も自分が伝えたいと思った内容とそれを伝えるのに効果的な表現を選択してやり取りを行った(収束的思考)。教師は子供たちにデモンストレーションのよさやペア活動で工夫したことを発言させ、全体で共有したことで、収束的思考が適切に働くよう支援した。そうしたことで、子供たちはどのような表現を用いれば会話を展開することができるかを知り、即興的に相手に自分の考えを伝え合うことができた。さらに、内容面についても深く考え、相手の意見を鵜呑みにすることなく、より多くの情報や相手の考えを得ようとする姿が見られた。以上のことから、4つの手立てを用いたことが、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育むことに有効であることが検証できた。

しかし、拡散的思考や収束的思考を働かせる場面において、やり取りを行う際に子供たちは積極的に発話をするものの、言いたいことや聞きたいことはあるが伝え方が分からないと感じる子供が多くいた。これは、授業の中にRSとASの2つの場を設定し、拡散的思考と収束的思考を何度も繰り返したことにより子供たちが相手に伝わりやすくするために、得られた情報や内容について考えることが十分に行われなかったことが原因と考える。そこで、2年次のねらいを以下のようにした。

6 2年次のねらい

拡散的思考を働かせる場面と収束的思考を働かせる場面をどの学習の流れの中に位置づけると、得られた情報や伝えたい内容を整理し、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育むことに有効であるかを検証する

これまでの成果と課題を踏まえ、2年次では、本校英語科の目標である得られた情報や伝えたい内容を整理して、伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供の姿を目指し、拡散的思考を働かせる場面と収束的思考を働かせる場面をどの学習の流れの中に位置づけるかを見直していく。得られた情報や内容を整理していく活動の中で、内容や表現をどのようにすれば相手に伝わりやすくなるかについて思考させ、それらを基に、やり取りの発表などの活動に取り組んでいく。そして、その結果伝わりやすい英語でコミュニケーションを図る子供を育むことに有効であるかを検証する。

注1) Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching assessment 外国語学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠 縦軸は言語能力のレベルの記述があり、横軸は、聞くこと、読むこと、やり取り、表現、書くことの5技能に分類されている。

注2) Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習 社会・理科などの教科や時事問題・異文化理解といったトピックの内容学習と言語学習を有機的に統合しその両方を学ぶ学習法。

注3)「4つのC」とは、Content (科目やトピック) , Communication (語彙・文法発音などの言語知識や読む, 書く, 聞く, 話すといった言語スキル) , Cognition (さまざまなレベルの思考力) , Communityまたは Culture (共同学習, 異文化理解) である。

引用文献

1) 和泉伸一『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業 生徒の主体性を伸ばす授業の提案』アルク, 2016年, 75ページ

参考文献

文部科学省『中学校指導要領解説外国語編』開隆堂, 2018年

同『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」』の形での学習到達目標設定のための手引き』, 2013年

伊藤治己『アウトプット重視の英語授業』教育出版, 2008年

金子朝子・松浦伸和『新学習指導要領の展開』明治図書, 2017年

菅正隆『中学校教育課程実践講座外国語』ぎょうせい, 2017年

吉島茂他編訳『外国語教育Ⅱ 外国語学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日新聞社, 2004年

投野由紀夫『英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』大修館書店, 2013年

高島英幸『英語のタスク活動とタスク』大修館書店, 2005年

田中武夫・田中知聡『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店, 2003年

鈴木渉『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店, 2017年

上山晋平『英語教師のためのアクティブ・ラーニングガイドブック』明治図書, 2016年

Swain, M.1998. Focus on form through conscious reflection. In C. Doughty & J. Williams (Eds.). New York: CAMBRIDGE University Press

Do Coyle, Philip Hood, David Marsh 2010『CLIL Content and Language Integrated Learning』CAMBRIDGE University Press